ポケットモンスター　幼馴染の受難～School　Life～

凪

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ポケットモンスター　幼馴染の受難～Ｓｃｈｏｏｌ　Ｌｉｆｅ～

【Ｎコード】
Ｎ７７８９Ｘ

【作者名】
凪

【あらすじ】
これは『ポケットモンスター　幼馴染の受難』の学生時代の話です。ポケットモンスター　幼馴染の受難とは設定などが異なりますが、この話が完結したら改訂版を新たに投稿するので楽しみに待っていて下さい。
（注意）なお、それまで『ポケットモンスター　幼馴染の受難』は検索から除外します。

プロローグ（前書き）

舞台はホウエン。イッシュ地方のポケモンは登場しません。
学園の名前は次回登場します。

プロローグ

新たなクラスと学友に心を躍らせながら去年も通ったサクラが舞い散る道を再び歩く。
正面の掲示板には沢山の人だかりが出来ており、その中の一人が振り向く。それは見知った元学友。

「よぉ！シズク今日から二年だな」
「そだな、スグル」
「今掲示板見たけど俺達揃ってCクラスだ」
「そか、んじゃ今年もよろしく」

また同じクラスか・・・変わらないなぁ・・・。
変わらない学友。変わらない教師。そして・・・

「「「うおおおぉぉぉぉ！！レンカさあぁぁぁぁぁん！！」」」
「「「おねぇさま！こっちむいてぇぇぇ！ハジメさんもぉぉ！」」」

変わらない黄色い声。
校門から二人の男女が歩いてくる。長い紅髪を靡かせてやってくる綺麗な少女、レンカ。僅かに緑が混じった短い黒髪の男から見てもかっこいいと思える少年、ハジメ。勉強もポケモンバトルの腕もトップクラスで校内の人気者の二人。

「相変わらずすげぇなお前の幼馴染は」
「そだな。何で幼馴染なのか不思議だよ」
「さっき一緒に確認したけどあの二人はAクラスだってよ」
「うし！」

「・・・お前だけだろうなぁ。同学年でそんな反応するの」

小さくガッツポーズをすると傑が隣から呆れた視線を向けてきた。

「何言ってんだよ。一緒にいても面倒事に巻き込まれるだけだぞ？」

学園に入る前は酷かった・・・何度あの二人関係で覚えの無い恨みや嫉妬を向けられてきた事やら・・・。

去年も同じクラスじゃなかったから学園では関わらずに済んだし、家ではスグル達と遊んだりしていてほとんど会わなかった。今年もそうなるといいなぁ・・・。

「そういえば知ってるか？今年俺らの学年に二人編入生が来るらしいぜ？」

「へぇ～」

この時俺は知らなかった。この編入生が俺を騒動に巻き込む事も、それにより去年から関わりを断っていた二人と再び関わる事になるとは。

始業＋入学

『え～新入生、在校生の皆さんおはようございます。只今よりホウエン地方立トウカ校の入学式兼始業式を始めたいと思います』

壇上の校長のそんな出だしから式は始まった。

このホウエンにある学校は入学式と始業式、卒業式と終業式が同時に行われる事でちょっと有名だ。

『校長先生のお話』

『生徒の皆さん、おはようございます。春休みの間ちゃんと・・・・』

あ～やっぱり先生の話って長いなぁ～。・・・ヤバ、眠気が・・・・ＺＺＺ。

～☆～

「・・・い、・・きろ・・ク。シズク！起きろって！」

はっ！完全に寝てしまった。周りを見ると数クラスはすでに移動を始めていた。

「ん～！サンキュースグル。うちの担任は誰になった？」

「去年と同じムタセンだ。ってかお前何時から寝てたんだ？」

「校長の『春休みのの間～』辺りから」

「ほぼ初めっからじゃねぇか」

ムタセンとは去年俺達のクラスの担任だったムラタ先生の略称の

事で、現在２６歳独身（恋人はいるらしい）だ。

「そうそう、転入生の事も出て来たぜ。一人はうちのクラスでもう一人はＡクラスだってよ」

「ふ～ん。どんなんだった？」

「Ａクラスの方は結構明るい雰囲気の子で、うちの方は可愛いけど若干近寄りがたい感じだ。しかも一つ下で飛び級してきたってよ」

「じゃあ頭も良いしバトルも強いのか。うちの主戦力だな」

「ああ、後でクラスで自己紹介すると思うぜ」

『２－Ｃ、退場して下さい』

放送と共にうちのクラスも移動を始める。

～☆～

「よし！全員揃ってるな。俺はこのクラスの担任になった「「「ムタセンーーー！！」」」・・・まぁ、初めての奴もそうじゃない奴もよろしく」

Ａ～Ｄクラスの１クラス辺りのの人数は１５～２０人程度。だが別に少ない訳じゃないむしろこの学年は多いくらいだ。大抵の奴は学校に入らず旅に出るやつばかりだからだ。

「人数も少ないし自己紹介は彼女だけでいいだろう。白織、自己紹介するんだ」

「・・・はい」

ムタセン呼ばれ前に出たのは長い銀髪の女の子だ。身長は１４０ｃｍ程で育った様子の無い胸。・・・美少女というより美幼女。確かに顔は整っているが、無表情なので若干近寄りがたい雰囲気だ。

「・・・白織　ユキハ、１２歳・・・」
『白織って・・・』
『もしかしてあの白織！？』

白織と言えばシンオウを中心に世界的有名なデボンに並ぶ大会社の社長の名字だ。もしかして彼女は社長令嬢か？・・・・ってあれ？何かこっちをじっと見てるような・・・？

（おいシズク。なんかお前のこと見てないか？）
（スグルもそう思うか？気のせいだと思ったんだが・・・）

隣のスグルが小声で話かけてきた。しかし俺には全く心当たりがない。

「ほらお前ら静かにしろ。これからは同じクラスの仲間なんだから仲良く・・・って白織？」

ムタセンが諌める中、彼女は俺の前にやってきた。

「・・・え～っと？」
「・・・」
（おい！やっぱお前なんかしたんじゃないのか？）
（・・・覚えはないだが・・・ん～）
「・・・た」
「ん？今なんて？」
「・・・ようやく会えた」
ギュッ！！
「ハ？」
「「「「「「えっ！！！」」」」」」

・・・ナゼオレハハジメテアッタトシシタノヘンニュウセイニダキツカレテイル？

再会＋過去

現在の状況：？固まる周囲　？固まる自分　？瞬きしているムタセン　？抱きついている編入生以上。
スグルに視線を向けると奴は瞳で語っていた。

（おいおいシズク。どこでそんな綺麗な子と知り合ったんだ？）

その瞳に俺も返す返事をする。

（いや、全く覚えがないんだが！？）
（じゃあなんで抱きつかれてるんだよ！）
（・・・誰かと勘違いしてるとか？）
（（（（（それだ！！！！））））））

最後に俺達の視線の会話に入り込んできたのはクラスの男子達。あいつ等は会話（視線による）に入ってくる前は俺に嫉妬の視線を向けていた。

（そうだ！そうに決まっている！）
（きっと俺と間違えたんだ！俺はあの子と（妄想の中で）会った事がある！）
（それなら俺だって！）
（俺もだ！）
（（（（（（・・・・・・サイテー・・・・・・））））））

あいつらは女子達が蔑んだ目で見ているのに気付かないんだろうか・・・？

「・・・あ～、白織。崎下と知り合いかなのか？」

復活したムタセンが白織に質問する7．あっ、ちなみに崎下は俺の苗字。

「ん・・・4年前に、シンオウのキッサキで・・・」

4年前のキッサキ？・・・銀髪の女の子？

・・・ポク、ポク、ポク、ポク、ポク、ポク、ポク、ポク、チーン！！

「ああ！あの時のイーブイの子！」

「（コクコク）」

俺が叫ぶと白織さんは嬉しそうに頷き、男子達は

「やっぱ知り合いじゃね～か！！」

「許さん！！」

「殺す殺す殺す殺す（以下略）・・・」

嫉妬に狂っていた。

「なあ、どんな出会いだったんだ？」

興味が湧いたようでスグルが彼女との出会いについて尋ねてきた。

「ん～。あれは4年位前、俺が7歳の時に家族でシンオウのキッサキ地方に行った時・・・」

～4年前　シンオウ地方・キッサキシティ～

「・・・暇だ」

その日は家族旅行でキッサキシティのキッサキ神殿を見に来たんだがジムの許可がいるらしく入れなかった。残念に思ってると親父が「すぐにキッサキのジムリーダーを倒して許可を貰ってくるからどこかで遊んでなさい！」と言ってジムに行ってしまった。

姉ちゃんは親父のバトルに興味があるらしく、母さんと一緒に親父について行き、俺一人が残された。

「さむっ！」

寒いならポケセン（ポケモンセンターの事）待ってればいいのに、当時の俺は何故か町の外に向かっていた。

町の外をブラブラしてると不意に啜り泣きが聞こえてきたんだ。俺は声の方へふらふらと誘われるように向かった。するとそこには

「なんと！見事な冷凍ミカンが！」

「真面目に話せ（スパーン）」

スグルがどこからか取り出したハリセンで俺の頭をブッ叩いた。・・・地味に痛い。

「まぁ、そこにはイーブイを抱いた銀髪の女の子がいたんだ。まぁ、多分白織さん。その後色々あって彼女と街に帰ったんだ」

「色々ってなんだ」

「色々は色々だ」

「・・・ふ～ん、そっか」

スグルは何か察してくれたようだが女子の方々が若干不満そうだ。

「ん～じゃあ、白織は崎下の隣だな。知らない人より知ってる人が近くにいた方が心強いだろ。崎下、放課後学校案内してやれ」

「へ～い」

「んじゃ、明日について話すぞ。って言っても明日は部活動紹介があるだけだからしっかり準備するよう。んじゃ解散」

驚きの内容（前書き）

後書きにおまけがあります。

驚きの内容

「・・・で、ここが音楽室。後どこか知りたいところは？」
「・・・大丈夫」
「そっか。じゃあ帰るか」
「・・・待って」

放課後、主な教室を白織さん案内し、帰ろうとしたところで白織さんに服を掴まれた。

「何？」
「・・・どうしてあの時の事、嘘ついたの？」

・・・さっきの教室での話か。

「別に嘘なんかついてないさ」

そう、俺は嘘はついてない。ただ白織さんが三匹の野生のポケモンに囲まれていた事を話していないだけだ。

「・・・じゃあ何で「「「「「きゃーーーーー（うおーーーーーー）！！」」」」・・・何？」
「ああそうか。今はポケバト部の活動時間か」
「・・・？？？」
「うちの最も人気のある二人が所属している最も人気のある部活。丁度窓から見れるんじゃないか？」

現在俺達がいるのは校舎の三階。グラウンドで行われるポケバト部（正式名称：ポケモンバトル部）のバトルがじっくり見れるだろ

う。
窓からグラウンドを見てみると予想どうりレンカのルカリオとハジメのジュカインがぶつかり合っていた。

～☆～

「ハオウ、接近して『ブレイズキック』！」
「リョクオウ、『かげぶんしん』で躱せ！」

脚に炎を纏わせた蹴りをルカリオが放つが、大量に現れたジュカインの分身をすり抜けるだけだった。

「それなら『はどうだん』！」

焦れたレンカは必中技である『はどうだん』を指示。ルカリオが生み出した波動の球は本物のジュカインに真っ直ぐ向かう。――――しかし、それに対しハジメは冷静に対処する。

「『はどうだん』を切り裂け！『リーフブレード』！！」

ジュカインは腕の葉の刃（やいば）を振るい、『はどうだん』を真っ二つにする。切り裂かれた『はどうだん』はジュカインの後方で地面にぶつかり爆発した。

～☆～

「・・・強い」
「うちの学校でもトップクラスの二人だからな。じゃ、俺は帰る」
「・・・私も」
「最後まで見ないの？」

「・・・充分」

一階に降りた俺達は、人の群れの後ろを通り校門から出た。

～☆～

「・・・・なぁ、どこまで一緒に来る気？」

「・・・まだ」

さっきからずっとこの調子だ。

校門を出てからすぐに別れると思ったが、家が同じ方向らしくさっきからずっと一緒に歩いている。もうすぐ俺ん家なんだけど・・・。

「・・・ん、此処」

「此処って・・・」

彼女が言う『此処』・・・それは丁度俺ん家の真ん前につい最近できた豪邸。ちなみに俺ん家の隣はレンカの。さらにその隣はハジメの家だ。

「それじゃあまた明日「・・・待って」・・・何？」

自分の家に入ろうとする俺を止める白織さん。一体何が？

「・・・兄さんと挨拶に行くから、ちょっと待ってて」

「は？」

小走りで家に入っていく白織さん。挨拶って・・・。

～☆～

「初めまして、向かいに引っ越してき白織です。私はユキトで、こっちは妹のユキハです。そちらのシズク君とは同じクラスだそうで」

「あら～どうもご丁寧に。私はシズクの母の崎下ユカリと言います～。こちらはシズクの姉のミズキ。・・・ところで、ご両親は？」

「母は数年前に他界し、父はシンオウの本社にいるのでこっちにいるのは私たち二人だけです。」

「若いのに大変ですね～」

「そちらの旦那様は？」

「主人は冒険家でして・・・今もどこかを旅してるんです～」

現在、我家、崎下家（母さん、姉さん、俺）と隣に越してきた白織家（ユキハ、ユキト）でリビングで向かい合っている。

ユキトさんは短い銀髪の綺麗な男性で今年で１７歳と若いが、親にホウエンの支部を任せられている人で、世の女性が放っておかないだろう。

姉さんはユキトさんの一つ下の１６歳。俺と同じ長い黒髪だが、姉さんは髪を上の方で纏めてポニーテールにしている。現在はポケモン保護官というポケモンを保護する仕事についている。

「さて、挨拶はこれくらいにして、本題を話そうか」

え？挨拶が本題じゃないの？

「シズク君、妹のユキハの事をどう思う？」

どう思うって・・・。

「まだあまり話してないから何とも言えませんけど・・・いい子だと思いますよ？」
「・・・／／／（ぽっ）」
白織さん、何故そこで頬を赤く染める。
「ふむ。・・・シズク君、君さえよければユキハと結婚を前提に付き合わないかい？」
「はっ？」
「なっ！？」
「まぁ！」
な、何言ってんだこの人はーーーーー！？
「ああ、言っておくけどコレはユキハが望んだ事であって僕が決めた事じゃないよ？」
「・・・ん（こく）」
え、えええぇーーー！！何で！？もしかして４年前のあれ（ユキハとの出会い）が原因！？
「それで？返事は？」
「ええっと「当然却下だ！！」何で姉ちゃんが答えるの！？」
立ち上がった姉ちゃんが白織家の二人を睨む。
「シズクがいなくなったら私は、私は・・・」
「姉ちゃん・・・」

俺がいなくなってそんなに寂しいと思ってくれ・・・。

「私は！いったい誰に食事を用意して貰えばいいんだ！！」

「自分の心配かよ！！」

るわけ無いよねやっぱり！家では当然のように俺をこき使うし、我家の人間はまともに料理できないもんな！

「だから！シズクを婿に出すわけにはいかん！」

「しかも俺が婿に行くこと決定か！」

向こうが嫁に来るかもしれないのに！

「安心してください。彼がユキハの旦那になるということはあなた達も私達の家族。当然使用人をつけるので食事の心配も問題ありません」

「シズク！結婚式はどこでする？」

「切り替え早！しかも話も飛びすぎ！まだ結婚できる年齢じゃないぞ！？」

「それでシズク君、答えは？」

後ろでは母さんと姉さんが式場のパンフを見ながらどこがいいか探しているが、さっきも言った通りまだ結婚できる年齢じゃないから！

「ええっと、正直、白織さんは良い子と思いますけど恋愛感情は抱いてません。それなのに付き合う・・・ましてや結婚を前提じゃ白織さんに失礼だと思います。それに俺にはなりたいものがあるから・・・。だから・・・ごめんなさい」

「ちっ」

姉ちゃん、後ろで舌打ちすんな！

「ふむ。・・・合格かな（ボソッ）」

「へ？」

「確認するけど、君がユキハにそういう感情を抱いたら別に構わないんだね？」

「白織さんがその時にまだそう思ってたら・・・」

「そっか・・・ユキハ」

「・・・ん、頑張る」

「うん。後は自分で頑張るんだ。皆さん、これからもどうかよろしくお願いします。それでは」

「・・・さようなら」

最後にそういって白織兄妹は帰って行った。・・・とりあえず

「飯の準備するか」

驚きの内容（後書き）

おまけ　～ユキハの受験前（ユキト視点）～

明日はいよいよユキハのトウカ校の受験だ。あそこにユキハの初恋の少年が通っているらしい。

合格間違い無しの筈なんだがユキハは何か悩んでるようだ。無表情だが兄である僕には分かる。一体何を・・・？

「ユキハ、何を悩んでるんだい？」

「・・・兄さん」

ユキハは一瞬迷ったようだが真っ直ぐ僕に目を向け言った。

「・・・年下の同級生と後輩、どっちが萌える・・・？」

「・・・ユキハがおかしくなったぁーーーーー！！」

結局、長く一緒にいられる同級生にしたらしい

変化する日常（前書き）

今回も後書きにおまけあります。

変化する日常

「んじゃ、いってきま～す」

翌日、何時もの時間に家を出ると、玄関に白織さんが立っていた。

「・・・おはよう」
「お、おはよう・・・」

昨日の事があるから若干話しづらい・・・。

「もしかして待ってた？」
「・・・うん。・・・一緒に登校しようと思って」
「そ、そう。じゃあ行こうか白織さん？」
「・・・ユキハがいい」
「へ？」
「・・・呼び方。それに普通に話して」
「あ、ああ分かった。・・・じゃあ、行くかユキハ」
「・・・うん・・・！」

満面の笑顔で返事するユキハは可愛かったと追記する。

～☆～

いつもの通学路を歩いていると見慣れた後姿が目に入ったので、声をかける。

「よ！スグル！」
「お！シズ・・・ク？」

しかし、何故か振りかえった瞬間固まった。

「どうした？」

「・・・おい、何で白織さんが一緒にいるんだ？」

「ああ、ユキハの家が俺の前でな、待っててくれたから一緒に登校したんだ」

そう告げるとスグルは固まり、元に戻るといきなり詰め寄ってきた。

「おい！何で白織さんの事を名前呼びしてんだ！？」

「な、何でって登校中そう呼んでくれって本人が・・・」

「・・・ホント一体どうゆう関係なんだ？」

「だから「・・・婚約者（フィアンセ）候補」・・・へ？」

そう言いながらユキハは俺の腕に抱きついてきた。・・・ていうか腕に小さいけど確かに存在する胸が当たってるんですけど！？

「・・・シズクは私の、私はシズクの婚約者候補」

「「「「「「なぁぁぁぁにいいいいいい！？！？！？！？！？」」」」」」

周りの男子が嫉妬と怒りで狂うなか、スグルは若干青い顔で俺の後ろを気にしながら尋ねる。

「ホ、ホントなのか・・・？」

「いや、確かに結婚を前提に付き合わないか家族の人に聞かれたけどちゃんと断ったぞ？」

「・・・でも、私に恋愛感情を抱いてないからって・・・そうい

う感情を持ったら受けてくれるって言った」
「ああ、なるほど」
納得。だから候補なのか。確かに無いとは言い切れないしなぁ・・・ユキハ可愛いし。って事は登校の事もこの抱きつきも名前呼びもユキハなりのアピールって事か。
「おのれ崎下！なんて羨ましい！」
「すぐにファンククラブ全メンバーに連絡を！崎下シズクを第一級抹殺対象にすると！」
「コノイカリ、ドウブツケテクレヨウ・・・！！」
周りの男子が大騒ぎする中、スグルはさらに顔を青くして俺の後ろを気にしてる。
「スグル、さっきから俺の後ろを気にしてるけどなんかあるのか？」
「い、いや！何でも！そ、それより早く行こうぜ！」
「お、おう、そうだな」
ここにいても殺されそうだし・・・。そう思いながら俺はスグルの後を追い、それにユキハも続いた。

スグルｓｉｄｅ
ま、まさか一日で婚約者候補と名乗り出るとは・・・白織さん、見た目と言動に似合わず意外と度胸がある。
今の話、確実にあの人に聞かれただろうな・・・。確実に部活で誰か八つ当たりされる。
俺の所属しているポケバト部部長、レンカに・・・。

変化する日常（後書き）

レンカｓｉｄｅ

私は須藤レンカ。親戚には現シンオウ四天王・オーバがいて、よくバトルを教わっていたから同年代ではほとんど相手がいなくなった。

そんな私には幼馴染が二人いる。

一人は私と互角のバトルができる三谷ハジメ。もう一人はバトルをほとんどしない崎下シズク。

幼い頃から私達は一緒に遊んでいた。たまにシズクはお父さんと一緒にどこかに行っていないけど、それでもとても楽しかった。・・・それに私は彼が大好きだったから。ハジメも親友だったから。

けど、シズクは次第に私達に会わなくなってきた。

理由は分かる。私とハジメは幼い頃から周りに『綺麗』や『かっこいい』と言われていた。だから同年代の子はそこまで容姿に優れていないのに私達と一緒にいるシズクが気に入らなかった。（・・・それによく私達に巻き込まれて誘拐されたりしていたし）

だから私達も離れた。シズクにこれ以上迷惑をかけないために。

けど、１０歳になって彼が旅に出ないで学校に行くと聞いて離れたくない私達もすぐに入学を決めた。

家は近い。けど一緒に行けばまた迷惑がかかる。けどシズクを少しでも見ていたい。だから私はシズクが家を出た後にこっそり後ろからついて行く事にした（ハジメには「・・・これってストーカーみたい」と言われた）。

一年では違うクラスでシズクに彼女が出来ないか心配だったけど、シズクのクラスの女子は皆ハジメしか眼中に無いと同じ部活のスグル（今のシズクの親友で私の想いを知る数少ない一人）に聞いて安心した。

けど、見てしまった。聞いてしまった。

転校してきた白織さんが私と同じ思いをシズクに抱いている人だと。

部活動紹介

キーンコーンカーンコーン

朝のホームルームのチャイムが鳴る中、我がCクラスは現在、

「殺す殺す殺す・・・」

「後は人形（藁製）に奴の髪を・・・」

「・・・（チキチキチキ）（無言でカッターの刃を伸ばしている）」

等々、黒い感情が渦巻いている。

「（ガラッ！）よーし、ホームルームを・・・（カラカラカラ・・・）」

「先生、帰らないでください」

「新谷（スグルの事）、一体何が・・・？」

「それは・・・」

「よくぞ聞いてくれましたムタセン！」

「銀髪幼女が～～～～！！」

「白織さんが～～～！！」

「・・・という訳です」

「よく分からんがなんとなくは分かった」

スグルとムタセンの会話に割り込んだクラスメイト（男子のみ）の言葉でムタセンも何となく現状を理解できたようだ

「ほらお前ら、静かにしろ～ついでに物騒な物をしまえ～」
「「「「「・・・っち」」」」」

恨めしそうにこっちを見つつもムタセンの指示どうりおとなしくする男子一同。

「んじゃー今日の日程について説明するぞ。今日はこの後各教科の教科書の配布後、体育館で部活動の説明があるからすぐ移動。何か質問は？」

「「「「「崎下の粛清について先生はどうするべきだと思いですか？」」」」」

「程々にしろよ」
「止めようよムタセン！教師として！」
「んじゃ教科書の搬入お願いしまーす」

む、無視？酷い・・・。
俺ががっくりと机に机に突っ伏している間も数体の格闘ポケモンによって教科書は運び込まれる。

「・・・大丈夫？」
ああ、ユキハ。心配してくれるのは素直にうれしい。けど気づいて。男子が黒いオーラを放ちながらこっち見てるから。

～☆～

「全員教科書は行き渡ったか？」
「「「はい！」」」
「んじゃあ全員体育館へ移動！部活動生は準備もあるから急げよ

？」

ムタセンはそう言って教室から出て行った。
それを皮切りに次々と移動を始めるクラスメイト。俺は周囲の襲撃に警戒しながらスグルに近づく。

「・・・はぁ」
「どうしたスグル？朝からずっと暗いぞ？」
「・・・誰のせいだと思ってる」

恨みがましく俺を見るが一体何のことだ？俺には何も覚えが無いんだが？

「俺、お前に何かしたか？」
「したと言いたいが残念ながら何もしてない」
「何か引っかかる言い方だな・・・。それより早く行こうぜ。お前、ポケバト部だろ？」
「・・・はぁぁぁぁぁ・・・」
「あれ！？何かさらに暗くなった！？」

どうすっかなぁと思ってると服を引かれる感覚。これは・・・ユキハか？
振り向くと予想通りユキハが服を掴んでた。

「ユキハ、どうした？」
「・・・一緒に行こう」
「おう、分かった。スグル、ユキハが一緒でもいいか？」
「・・・ああもうどうにでもなれ」

のろのろとスグルが席を立ち、ようやく移動を開始する。

「・・・シズクはどこか部活入ってるの？」
「おう、写真部にな」
～☆～
『それではこれより、部活動紹介を始めます！視界は私、２－Ｂ報道部所属の武中ミサトがお送りします！最初はコンテスト部！』
教師のアナウンスに従って登場する生徒達。そして始まる紹介やパフォーマンス。
「・・・凄い」
「今年も張り切ってるなぁ」
「・・・（ぐったり）」
「・・・ホントに大丈夫か？」
準備が終わり、クラスの整列場所に着いた俺が見たのは疲れ切ってぐったりしたスグルだった。一体何があったのか気になったが、目が据わっていたスグルに聞くのは怖かった。
「今年もラストはポケバト部か」
「・・・今年も？」
「おう、去年もポケバト部がラストだったんだ。部長と副部長のバトルは見物だったなぁ。今年はレンカが部長らしいけどどうすんだろ？」
「・・・知り合い？」
「一応な」
『素晴らしいパフォーマンスでしたね！それでは～』

～数時間後～
「そろそろ俺の番だから行って来る」
「・・・ん、分かった」

～☆～

『さぁ次は写真部の登場です！お願いします！』

舞台袖から登場する写真部。・・・俺一人だけだが。

『え～写真部は２－Ｃ所属の崎下シズク君のみの部活です。去年までは彼を含め５人の部活動だったんですが他４人は卒業してしまい現在一人となっております。ここで新入部員を獲得しなければ廃部ですねぇ～』

余計なことは言わんでよろし！

「え～聞いての通り、写真部は現在人がいません。写真を撮るのが好きな人、現像が好きな人は大歓迎！また、初心者でも構いません！主な活動としては、好きな写真を撮影し、それをコンクールに出展するなどです。それでは入部待ってま～す」

『え～それではここで、歴代写真部部員の写真公開を行います。スクリーンをご覧ください」

次々にスクリーンに映される写真。野生のポケモンや草花、野山などの大自然に歴史を感じさせる古い建造物。・・・そしてなぜか

木に逆さ吊りされた幼い俺の写真。

「ってちょっと――――――！！何この写真！？こんな写真俺入れてないよね！？」

『え～つい先程匿名で届けられた物ですが面白かったのでついでに』

「誰だこんな物届けたのは！」

『裏には補足として「料理を失敗して姉に逆さ吊りにされるシズク（６歳）」とありますね。このような面白おかしい写真を我が報道部は記事にしています。興味のある方は是非』

「さらっと自分の部の紹介するな――――！！」

～☆～

「「・・・（ぐったり）」」

「・・・大丈夫？」

ぐったりしている俺とスグルを心配そうに見るユキハ。あれからしばらく、俺を見てはこそこそ笑う生徒がいてすっかり精神的に疲弊してしまった。

『さあいよいよ次で最後！最後は皆さんご存知のあの二人の所属しているポケモンバトル部です！』

「「「「うおおぉぉぉぉ――――――――！！」」」」

「「「「きゃぁぁぁぁ――――――――！！」」」」

男女の黄色い叫びと共に現れたのはレンカとハジメ。

「皆さん、我がポケモンバトル部は日々バトルの腕を磨き、強く

なることを目的とした部です」
「バトルに自信のある生徒は是非希望してください」
そう希望するだけなら自由なのだ。実際入部できるのは希望者の中の実力のある数名のみ。そのためポケバト部は毎年最も入部希望が多いながらも入部人数が少ない部なのだ。
現在も部員は5名のみ。今年は何人入部出来るか・・・。
「さて、例年通り部長である私と副部長のハジメとのバトルをしようと思ったのですが・・・」
「今年は部長のレンカが戦ってみたいという生徒バトルすることになりました」
『な、なんと〜！女王（クイーン）レンカがバトルをご所望の生徒がいるらしい！？　果たしてその生徒はいったい！？』
「私が戦いたい相手は――――――――2－C、白織ユキハ」
ざわめきながら周囲の視線が俺の隣のユキハに集中。・・・レンカがこっち睨んでて怖いんですけど。
「さぁ、上がってきなさい」
「・・・ん」

少女たちの戦い

体育館の中心の床からバトルフィールドが上がってくると、レンカはステージから降り、フィールドに歩き出す。今まで隣にいたユキハもフィールドに向かう。

やがてお互いにトレーナーゾーンにたどり着く。

『さぁ！両者トレーナーゾーンに立ちました！。なお、司会は引き続き私、２－Ｂ武中ミサトと』

『解説の三谷ハジメです』

『で、お送りします！』

『ではここでルールの説明を！使用ポケモンはお互いに一体のみ、道具は予めポケモンに持たせていた物のみ使用可能、技の使用できる種類は無制限！でよろしいんでしょうか？』解説のハジメさん？』

『去年もそのルールでバトルしてましたから問題無いと思います。ちなみに普段は公式戦を想定してるので技の種類は４つに絞って活動してますが』

二人はボールを取り出し睨みあう。

・・・何か二人が喋ってるみたいだけど、ここからじゃ聞こえないな。火花散ってるような気もするし・・・。

ユキハｓｉｄｅ

・・・目があってすぐに分かった。この人は自分のライバルだって。

「それじゃ、始めましょ」

「・・・その前に１つ確認」

そう、これだけはちゃんと確認しないと・・・。

「・・・あなた、彼の何」

「な、何って。それは幼馴染・・・」

・・・ああ、なるほど。

「・・・そう言い逃れする、自分の気持ちも言えない臆病者・・・」

「な！あなたこそ何なのよ！？」

「・・・婚約者候補」

「こ、婚約者候補！？そんなの認めないわ！」

「・・・あなたに認められる必要は無い。必要なのはお義母さんとお義姉さん」

「絶対に負けない・・・！」

「・・・こっちこそ」

『それでは、試合開始ぃぃぃ――――――――――――――！！』

「行きなさい！ヒリュウ！」

「・・・お願い、イヴ」

シズクｓｉｄｅ

『レンカ選手が繰り出したのは自身のエース、リザードンのヒリュウだ――――！対する白織選手は、な、な、なんとグレイシア！コレは相性的にユキハ選手が圧倒的に不利！これは早くも決着が着いてしまうか！？』

レンカは幼い頃からのエースの色違いの黒いリザードン。対するユキハはあの時のイーブイが進化したらしいグレイシア。恐らくユキハのエースポケモンだろう。

お互いのエース対決だ。相性に差があってもどうなるか分からない。

ハジメside

「先手必勝！『かえんほうしゃ』！」

「・・・『かげぶんしん』」

『レンカ選手、『かえんほうしゃ』を放つも、グレイシアが分身した～！これではうまく当たらない！』

確かに、フィールドには大量のグレイシア。この中から本体を見つけるのは難しいけど、レンカはちゃんと対抗策を持ってる。

「ならすべて薙ぎ払いなさい！『ねっぷう』！」

『おおっと！今度はフィールド全体を攻撃する技！これではいくら分身しても逃げられない！』

「・・・『ふぶき』

『ねっぷう』がフィールドを襲おうとするが、本体が飛び出し『ふぶき』を放つ。そして技がぶつかり合い、白い煙がフィールドを覆った。

『こ、これは、水蒸気！？一体どういうことでしょうか！？』

『『ふぶき』は冷気だけではなく大量の氷の粒が発生します。そ

お氷がさっきの『ねっぷう』で一気に溶かされたことが原因でしょう』

レンカも指示を出さない。こんな視界が悪い状態では危険と判断したんだろう。だがその判断は甘かった。

「『あられ』」

突如降り注ぐ霰。それがフィールドを襲う。

『アタ！ア痛タタタ！！と、突如発生した霰がリザードンを苦しめています！こ、これも白織選手の作戦でしょうか！？』

『イタ！お、恐らく。しかもこれはリザードンにダメージを与えるためだけのものではありません』

『と、言いますと？』

『グレイシアの特性は『ゆきがくれ』。雪や霰状態の時攻撃が当て辛くなります。それにこの状態ではリザードンも攻撃が難しいでしょう』

『しかしそれは相手も同じでは？』

『いや、それはどうでしょう』

「・・・『みずのはどう』」

《グオォォォォォォ！！》

「ヒリュウ！！」

突如下方から放たれる『みずのはどう』によってリザードンは撃ち落とされる。

『い、今のは水タイプの技！？しかもこの霰状態で当ててきましたよ！？』

『技マシンで覚えさせたんでしょう。それにグレイシアはシンオウでは吹雪の中の一部の地域でイーブイが進化したものです。この霰程度全く問題ないでしょう』
『で、ではこれってかなりピンチなのでは？』
『はい。でもきちんと対策はあります』
『そ、それは？』
『見てれば分かりますよ。レンカももう気づいてるでしょうし』

「ヒリュウ、『にほんばれ』！」

レンカの指示のもと、上空に熱原体を出すリザードン。それにより体育館内の天候は再び変わる。
フィールドに残っていた霰も溶け、グレイシアの姿が完全にさらけだされた。

『い、一変して今度はあっついですねぇ・・・。これがさっき言っていた対策ですか？』
『そうです。相手に有利な天候なら自分の有利な天候に変えればいいという訳です。それにリザードンを見てください』
『え～っと、何やら赤いオーラが発生してますね。もしかして特性の『もうか』ですか？』
『ええ、。『もうか』は自身の体力が少なくなると炎タイプの威力がものですからさっきの攻撃で発動したんでしょう。この状態で炎技を食らえば体力が減っていないグレイシアでもまず耐えられないでしょうね』

「これで決まりよ！『ブラストバーン』！」
「させない・・・！！『れいとうビーム』・・・！」

リザードンの口に現れる炎の球体。それがどんどん巨大化してい

く。躱せないと思ったのか、対戦相手の白織さんは氷タイプの『れいとうビーム』を指示。『ふぶき』では範囲が広すぎて決定打が与えられないし『みずのはどう』はこの日が強い状態じゃ威力が低いと判断したんだろう。レンカの技が決まるのが先か、白織さんが体力を削りきるのが先か・・・。

「発射――――!!」

「・・・!」

リザードンの口から放たれる炎。

グレイシアから放たれる冷気のビーム。

お互いの技がすれ違い、対象にぶつかる。

炎は火柱となりグレイシアを包み、冷気はリザードンを体の一部凍らせると尻尾の炎が弱まっていく。

炎が晴れるとグレイシアは倒れていた。

『決まった――――!グレイシア戦闘不能!勝者、須藤レン・・・んん!?』

しかし隣のミサトさんがレンカの名前を言おうとしたとき、

グラッ・・・ズゥゥン

リザードンの体が傾き、倒れた。

『リ、リザードンも戦闘不能!?この勝負引き分けです!!』

写真部の危機

「はぁ・・・」

部活動紹介からすでに一週間が経った。しかし写真部に入った新入部員は二人のみ。ユキハは入部しようとしていたが、周りからの強い要望と俺の自分のやりたい事をするようにという言葉でポケバト部に入部。すでに『雪姫』という異名までつけられている。

「センパ～イ！！今来たッス～！！」

部室のドアを開け入って来たのはハゲ頭に黒い瞳の一年、工口(くぐち)ミキヒサ。新入部員の一人で俺の頭痛の種。

「今日もいっぱい撮って来たッスよ～！！」

机の上にミキヒサが写真を広げる。この写真の共通点、それは・・・全て女子だという事。

太腿のアップ、着替え中の物、パンチラ写真。いろいろと問題になりそうなものしか見当たらない。

「うふ、うふふふふ・・・・・」

不意に笑い声が聞こえてきた。声の発信源に目をやると黒髪で目元を覆った女子が写真を見て鼻血を流しながら笑っていた。

彼女は加納(かのう)　サツキ。ミキヒサと同じ一年の新入部員で最近の俺

のもう一人の頭痛の種。

「なんだ、サツキはもう来てたんスか」

「ハァ、ハァ、ハァ。・・・あら？ミキヒサ来てたの？一緒に写真を見ながら筋肉が絡み合うところを想像しない？」

「遠慮するッス。俺にソッチの趣味は無いッス」

「そう？」

「それよりその鼻血を何とかしろ」

「あっ、すいません」

そう。彼女は腐女子であり、筋肉フェチなのだ。

ならソッチ系の本を買えば？と思ったのだが、彼女は自分で体格のいい男子の写真を撮り、それを二枚繋げて妄想するのが良いそうだ。

二人の趣味は入部してから活動初日で撮ってきた写真を現像した時、それぞれ男子と女子しか映ってなかったので聞いてみたところ暴露された。

さらに部活動紹介時の俺の木に吊るされた写真で俺がMだという噂が立ち、それも合わさり写真部は『変態の倉庫』と呼ばれ、誰も近づかなくなった。

「はぁ・・・」

「先輩、元気無いッスね。この俺の秘蔵の写真あげるから元気出すッス！」

「じゃあ私もとっておきの一枚を」

そういって二人が差し出してきたのは体操服が汗で若干透けている女子の写真とガッシリした体格の柔道部の二人が組み合っている

（寝技）写真だった。

「いや、いらね・・・。それよりこのままだとせっかく二人が入部してくれたのに廃部になるぞ」

「「ええっ！！何で（ッスか）！？」」

『お前らの写真のせいだ』と思ったが一応もう一つの理由を告げる。

「人数の問題だ。部として認められるのは最低五人いる部。この学校には同好会は無いから五人いなきゃ二週間で廃部だ」

「そんな！？折角女子の写真を撮れるのに！？」

「男子の写真もよ！？」

「・・・今更だが言っとく、この部でも盗撮は犯罪だぞ？」

「「ええっ！？・・・ま、いっか今までと変わらないし（ッスから）」」

・・・こいつら盗撮やめる気ないな。

そう思っていると突然部室のドアが開いた。そこには眼鏡をかけ、緑色の髪を三つ編みにしている見慣れた姿があった。

「そんな写真部に提案があるんだけど？」

「佐山（さやま）先輩・・・」

「誰ですか？」

「三年の報道部部長の佐山　ミホ先輩だ」

「ムムッ！中々の太腿ッスね・・・」

「ミキヒサ、お前ちょっと黙ってろ。提案ってなんですか佐山先輩？」

「ええ、写真部と報道部を合併しない？」

合併の話（前書き）

遅くなりましたが、新年初投稿！

合併の話

「またその話ですか・・・」

新聞部と写真部の合併。

この話は俺が一年の頃からあった。

「ええ、条件は去年と同じで『そちらは今まで通り活動してもらって構わない。代わりに・・・』」

「『こちらの記事に載せる写真を撮影し、渡すこと』ですよね？」

「ええ」

この話は写真部の先輩達が断り続けていたが、現状の写真部では断るのは難しい。

去年は人数が定員に達していたから断ることが出来たが、今はたった三人。活動を続けるには受けた方がいいのは分かる。だが先輩達が守っていたこの場所を無くしたくないという思いがそれを反対している。

「それって盗撮はＯＫ何すか？」

「勿論。対象に気付かれない様にしなきゃいけない場合もあるし」

「男子生徒の撮影は？」

「部への密着取材もあるからその時撮ればＯＫよ」

「「先輩、受けましょう！」」

ああ！悩んでる間に数少ない部員の二人が丸め込まれた！

「さあ、部員は納得したわ。部員の意見を無視することは出来ないわよね？」

「くっ・・・・！」

「その話、ちょっとストップ！」

「！？誰！？」

『この話を受けるしか無いのか』

そう諦めかけた時、佐山先輩の後ろ。つまり廊下から足音と声が聞こえ、佐山先輩が振り返った時、一瞬だけ声の主の顔が見えた。

その顔はすっかり疎遠になっていた幼馴染、須藤レンカだった。

「あら、須藤さん。ポケバト部の部長のあなたがこんな所に何の用かしら？」

「ちょっと幼馴染のシズクに話があるだけよ。通してもらうわ」

レンカがそう告げると佐山先輩は一歩横にズレ、レンカが俺の前にやってくる。後ろでは佐山先輩が「ポケバト部部長の須藤さんと崎下君が幼馴染？スクープだわ！」と呟きながらこっちをじ～っと見てる。

「・・・こうして話すのも久しぶりね」

「・・・まぁな。んで、何の用だ？」

「ポケモンバトル部は写真部に合併を申し込むわ」

「「「「・・・はぁ！？」」」」

ここにいるレンカを除いた全員が驚きの声をあげる。

当たり前だ。ポケバト部が写真部と合併しても何のメリットも無いのだから。

「条件としては、そちらは何を撮影してもらっても構わないわ。

ただし、我が部の記録係としてバトル風景を撮影、又は録画してもらう事よ」
「ちょっ、ちょっと待ちなさい！合併の話は私達新聞部が先に出したのよ！？」
「でもシズクはまだ返事をしてないわ」
「それでも順番があるでしょう！」
「じゃあどっちの部が合併するかバトルで決めますか？」
「それじゃああなたが有利すぎるでしょう！」
「あの、勝手に話してるがまだ合併自体にＯＫしてないんだけど・・・」

「「ちょっと黙っててて！！」」

「・・・はい」
「「部長弱っ！」」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7789x/

ポケットモンスター　幼馴染の受難～School　Life～

2012年1月14日11時48分発行